

古着の山に登った日



愛 国本

「こんなところで、なぜ」。タイに来てから、街中で日本語の服を着た人を見かけ、そう思うことがある。有名大学運動部のおそろいのTシャツ、学校指定のジャージ、会社のユニホーム。タイ人が着ていることに違和感はあるが、どこかほほ笑ましい。

調べると、タイの首都バンコクは、世界中の古着が集まる東南アジア有数の拠点と言われ、「ユーズド・イン・ジャパン」の古着も多いという。2024年の財務省の貿易統計を見ると、日本からタイに約9000トンの古着が輸出されていた。

そこで25年7月、バンコクの古着市場として有名な、「パタウィコン市場」を訪ねてみた。

服、服、服……。所狭しと積み上がる古着の山の前で、客たちが服をかごに入れていた。1着5〜20バーツ（約25〜100円）程度。中には3層ほどの高さまで積まれた山に登り、探す人もいる。私も許可を得て登ってみた。足元には半袖、長袖、ジーンズ、スカート……。全て日本からの古着だった。

山の上で男性客に話しかけると、近くで古着店を営んでおり「ここで仕入れて10倍の値段で売る」のだという。男性は「日本の服は質が良くて、よく売れる」と言い、特にユニクロやGUなど、有名な日系ブランドの服を探していると語った。

店番の50代女性によると、この店は日本の古着のみを扱っており、毎日のように東部の港から荷台いっぱい積んだトラックが来るといふ。客の多くは古着店のバイヤーで、日本の古着人気によって売り上げも順調という。「日本では着られなくても、タイではまだまだ着られる」。売れ残った服を定期的に、地方の貧困地域へ無償配布もしているという。

「エコだなあ」。そう感心しながら周囲を眺めていたが、ふと、先ほどの男性客が、何度も服を手を取っては戻し、選ぶのに時間をかけていることに気づいた。よく見ると、毛玉や汚れが目立つ服や、春夏のタイでは使われなさそうな冬服を戻していた。

服の山の全てが、再び誰かに着られるわけではない。さそうだ。いずれ「ごみの山」になってしまう光景も、一瞬頭をよぎった。輸送時の船舶による二酸化炭素（CO₂）排出も考えると、もう手放しで「エコ」とは言えなくなってしまう。